

平成 30 年 6 月 18 日現在

機関番号：37111

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02686

研究課題名(和文)「学校認知英文法」構築のための構文教授法の開発：認知言語学の観点から

研究課題名(英文) Developing Teaching Methods of Sentence Constructions: From a cognitive linguistic view

研究代表者

長 加奈子 (Cho, Kanako)

福岡大学・人文学部・准教授

研究者番号：70369833

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：日本語と英語は出来事のとらえ方が異っており、それが構文にあらわれている。そこで本研究課題は、日本の中学・高等学校で学習する英語の構文について、特に、五文型、二重目的語構文、関係詞節、there構文に焦点を絞り、日本語を母語とする英語学習者の認知の特徴に沿った新たな教授法を構築した。本研究は、文法項目について、学習者に暗記を強いることのない、新たなアプローチを提案したという点で大変意義がある。

研究成果の概要(英文)：English and Japanese are different in that how native speakers construe events which they encode, and those differences appear in constructions. This study focuses on four constructions: the five sentence patterns, double object constructions, relative clauses, and there-constructions, and developed a new teaching approach that fills the cognitive gaps between Japanese learners of English and native speakers of English. This new approach will not force learners to memorize constructions or grammatical knowledge.

研究分野：応用認知言語学，第二言語習得

キーワード：認知言語学 英語教育 構文 学校認知英文法

### 1. 研究開始当初の背景

現在の中学・高等学校で教えられている文法(学校英文法)は、理論言語学の知見の恩恵を十分に受けているとは言い難い側面がある。しかし近年の認知言語学研究の深化と拡大に伴い、外国語教育および第二言語習得に対して新たな切り口を提供する可能性がにわかには有望視され、認知言語学の知見に基づく教授法も開発されている。特に前置詞や多義語の学習において、言語形式の背後にある共通のスキーマ(意味構造)に気づかせ、学習者自身が言語使用に基づき意味用法のネットワークを構築するという教授法の効果が高いことが実証されている。しかし、先行研究は語彙レベルを対象としたものがほとんどであり、英語を習得する上で避けて通ることができない構文レベルの教授法の開発および教育効果の測定には至っていない。

認知言語学は、言語には、認知主体である人間が持つ認知能力が反映していると考え、人間の生態的・民俗的な身体感覚に起因する能力を基盤に置き、言語の体系的な記述を行っている(Langacker, 1987, 1991 他)。この立場に立脚すれば、言語は言語使用から切り離された抽象的な原理や原則によって生成される文の集合体ではなく、言語使用者(母語話者)と認知的要因とが密接に関係して創発されたものであり、各言語に特有の出来事のとらえ方と切り離して言語を記述することはできない。つまり、母語が異なれば、言語を用いて表そうとする出来事のとらえ方に対する認知的な違い(事態認知の違い)が存在し、その違いがそれぞれの言語の構文に反映されていると考えることができる(池上, 1981, 2006 他)。そしてこの事態認知の違いが、日本語母語話者の、例えば there 構文の使用過剰に代表されるような「文法的だが英語らしくない英語」を産出する要因の一つであると考えられている。これまでの英語教育の現場では、「英語らしい表現」については「習うより慣れる」型の教育が行われてきており、言語使用者および外国語学習者の認知的な側面は無視されてきた。また、対象言語である英語のインプットが貧弱である EFL 環境下の日本においては、「慣れる」ことで自然な言い回しを習得することは極めて難しい。しかし認知言語学の知見を活用することで、これまでとは異なる新たなアプローチを提案することが可能となる。認知言語学は「図と地」の概念と主語と目的語の対応関係や参照点構造と種々の構文との関係、池上(1981, 2006)の「スル」言語と「ナル」言語など、日本語と英語に現れる認知パターンの違いを、構文レベルから談話レベルまで幅広く説明する道具を提供してくれる。これまでの外国語学習では、文法事項や構文を抽象的な原理、原則として覚えてきたが、母語話者の認知的要因、つまり出来事のとらえ方まで含めて学習することで、学習者の認知に沿

ったより効果的な外国語学習が可能になると考えられる。

#### 〔参考文献〕

- Langacker, R. W. (1987) *Foundations of Cognitive Grammar: Theoretical prerequisites*. Stanford Univ. Press.  
 Langacker, R. W. (1991) *Foundations of Cognitive Grammar: Descriptive application*. Stanford Univ. Press.  
 池上嘉彦(1981)『「する」と「なる」の言語学—言語と文化のタイポロジーへの試論』, 東京:大修館書店。  
 池上嘉彦(2006)『英語の感覚・日本語の感覚 <ことばの意味>のしくみ』, 東京:日本放送出版協会。

### 2. 研究の目的

本研究課題では、中学・高等学校で学習する英語の構文について、認知言語学の観点に立脚し、日本語を母語とする学習者の認知の特徴に沿った新たな教授法を構築することが目的である。認知言語学に基づく教授法は、語彙の指導において教育効果が実証されており、次なるステップとして、本研究課題ではこれまで研究開発対象となっていない構文にその対象を広げ学習教材を開発する。

外国語学習者の母語の影響は、日本語母語話者の there 構文の過剰使用のように、語彙レベルよりむしろ構文の選択において散見される。これまでは「英語母語話者はそのような使い方はしない」という指導が主であったが、認知言語学では「なぜそうなのか」という説明まで可能とする。そこで本研究課題は、中学・高等学校で必ず扱う五文型、二重目的語構文、関係詞節、there 構文に焦点を絞り、中学・高等学校の現場で教える英語教員が、(認知)言語学の理論的な知識を持たなくても十分活用することが可能な教材・指導法を開発することを目的とする。

### 3. 研究の方法

本研究課題は、日本語を母語とする英語学習者と英語母語話者の事態把握の違いを分析する為、学習者コーパス(例 ICNALE)および大規模コーパス(例 BNC, COCA)を用いて、構文の分析を行った。日本語を母語とする学習者との比較データとして、合わせて中国語を母語とする英語学習者についても分析を行った。また、日本の中学・高等学校で用いられる検定教科書において、構文がどのように扱われているかについて、調査をした。各種コーパスの分析結果および検定教科書の調査結果をもとに、五文型、二重目的語構文、関係詞節、there 構文について、中学・高等学校で教授可能な教授法を開発した。

#### 4. 研究成果

学習者コーパスの分析の結果、日本語を母語とする英語学習者は、母語である日本語の事態把握の影響を受けており、そのことが、構文使用に影響を及ぼしていることが分かった。この結果をもとに、各構文について、教授法を開発した。

##### (1) 五文型と二重目的語構文

本研究課題では、五文型を「出来事を捉えるための認知パターンの種別」と定義しなおした。そして、出来事を「モノ」と「モノ」の関係として捉える英語における典型的な認知パターンとして、第3文型を中心に設定し、5つの文型の相互関係を有機的につなぐネットワークモデルを構築した。

ネットワークの中心に位置するのが第3文型であり、その第3文型の派生形として、第4文型と第5文型を位置づけた。第4文型は、間接目的語と直接目的語の所有関係を大きなひとまとまりとして捉え、それを主語が動詞で表された行為により引き起こすという出来事のとらえ方である。一方、第5文型は、目的語と補語の関係を、主語が動詞で表される行為により引き起こす、または、その関係を気づくというとらえ方である。以上のことから、これら3つの構文を図1から図3のように図示した。

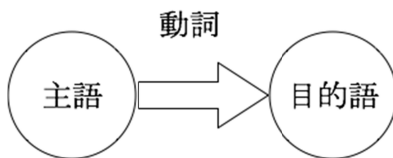


図1：第3文型のモデル

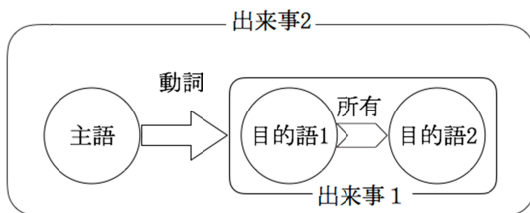


図2：第4文型のモデル

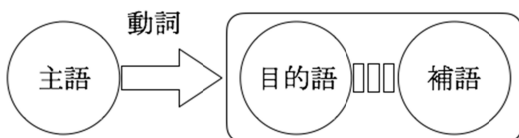


図3：第5文型のモデル

さらに、第1文型および第2文型は、1つの「モノ」に対する描写として位置づけ、図4、図5のように図示した。



図4：第1文型のモデル

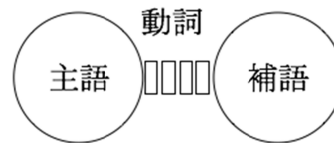


図5：第2文型のモデル

五文型の中でも、特に難しい第4文型（二重目的語構文）については、認知文法のエネルギー伝達モデル（Energy Flow Model）に基づいた教授法を開発を行った。

以上のモデル化に基づき、学習者の認知的な負荷が低くなるよう指導法を考案した結果、現在、教育現場で教えられている第1文型から順番に教えるのではなく、第3文型、第4文型、第2文型、第5文型、第1文型の順番で教えた方が、認知的負荷が低くなることが分かった。

##### (2) 関係詞節

関係詞節については、第3文型のモデルをベースに図式化を図6のように行った。

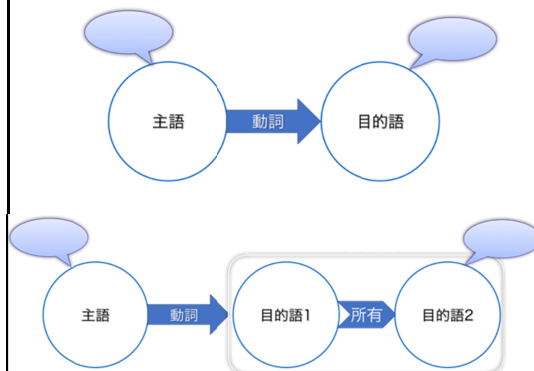


図6：関係代名詞節

関係詞節は、出来事を「モノとモノの関係」

として捉える英語ににおいて、その「モノ」を限定する、また「モノ」に補足情報を付与するための手段である。

また、学習者に混乱が生じやすい制限用法と非制限用法(継続用法)の違いについては、複数のモノから対象物を制限するための情報なのか、それとも、単なる対象物に対する追加情報の提示なのかを、写真やイラストを用いながら指導するようにした。

### (3) there 構文

there 構文は、英語であるにもかかわらず「場所と存在物の関係に着目する」という日本語の出来事のとりえ方に大変近いとりえ方をする構文である。そのため、there 構文については、特段、指導を行わなくても、学習者が頻繁に使用し、過剰使用が問題となる構文である。本研究課題では、「モノとモノとの関係」としてとらえる英語の典型的な出来事のとりえ方と、「場所と存在物の関係」としてとらえる日本語の出来事のとりえ方を比較し、さらに日本語のとりえ方と there 構文によって表される出来事のとりえ方を比較した。そして、日本語を母語とする英語学習者が、なぜ there 構文を使用したくなるのかに焦点を当てた教授法を開発した。

以上の内容について、現場の英語教員と意見交換したところ、大変好評であった。また、学習者にとっても、図式化することで、単なる暗記ではなく「理解」して使用することが可能となるという評価を受けた。本研究結果については、研究代表者の所属する大学で開催する平成 30 年度教員免許状更新講習において、「英文法に表れる日本語と英語の世界のとりえ方の違い」というタイトルで、中学・高等学校の教員に紹介する予定である。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

### 〔雑誌論文〕(計 1 件)

長 加奈子, 事態把握と外国語教育, 北九州市立大学基盤教育センター紀要, 第 25 巻, 2016, 123-137, 査読なし.

### 〔学会発表〕(計 6 件)

長 加奈子, 用法基盤モデルに基づく多読学習の分析, 外国語教育メディア学会メソドロギー研究部会, 2017 年 2 月 18 日, 西南学院大学.

長 加奈子, 日英の事態把握の違いをどのように英語学習者に教えるか, 第 8 回応用認知言語学研究会, 2016 年 3 月 22 日, 西南学院大学.

長 加奈子, 構文にあらわれる事態把握

の違い: コーパスに基づく実証, 英語コーパス学会第 41 回大会(招待シンポジウム), 2015 年 10 月 3 日, 愛知大学.

長 加奈子, 事態把握と構文: 二重目的語構文と関係詞, 大学英語教育学会第 54 回国際大会, 2015 年 8 月 30 日, 鹿児島大学.

長 加奈子, 日本人英語学習者の二重目的語構文使用の特徴と学校文法への示唆: 動詞 give の場合, 2015 年 8 月 3 日, 第 11 回英語語法文法セミナー(招待講演), 関西学院大学梅田キャンパス.

長 加奈子, 二重目的語構文をいかに教えるか, 第 7 回応用認知言語学研究会, 2015 年 7 月 4 日, 西南学院大学.

### 〔図書〕(計 3 件)

長 加奈子 他, (仮)認知言語学の視点, 開拓社, 印刷中(2018 年出版予定).

長 加奈子, 認知言語学を英語教育に生かす, 金星堂, 2016, 175.

長 加奈子 他, 言語研究と量的アプローチ, 金星堂, 2016, 307.

### 〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
出願年月日:  
国内外の別:

取得状況(計 0 件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
取得年月日:  
国内外の別:

〔その他〕  
ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

長 加奈子 (CH0, Kanako)  
福岡大学・人文学部・准教授  
研究者番号: 70369833

### (2) 研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし

(4)研究協力者

なし